

時代小説ベスト・セリウム・コレクション

6

講談社

スゴく存じ 不死身の男

ヒーロー小説集



あ

時代小説ベスト・セリウム

6



不死身の男

ヒーロー小説集

時代小説ベスト・セレクション 第六卷

ご存じ不死身の男 ヒーロー小説集

一九九四年九月二二日 第一刷発行

著 者 大佛次郎 他

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

郵便番号 一一二一〇一

東京都文京区音羽二一二一―二二

電話 編集部 (〇三三) 五三九五―三五〇五

販売部 (〇三三) 五三九五―三六二二

製作部 (〇三三) 五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Jirō Osaragi and Others 1994.

Printed in Japan

ISBN4-06-254906-9 (文2)

ご存じ不死身の男◆目次

鞍馬天狗〔風とともに〕

大佛次郎 8

柳生十兵衛〔無明斬り〕

五味康祐 28

眠狂四郎〔義理人情記〕

柴田錬三郎 48

遠山の金さん〔雪肌金さん〕

陣出達朗 62

月影兵庫〔もぐさ屋騒動〕

南條範夫 88

座頭市〔座頭市物語〕

子母澤寛 126

木枯し紋次郎〔上州新田郡三日月村〕笹沢左保 136

仕掛人・藤枝梅安〔殺気〕池波正太郎 180

獄医立花登〔女牢〕藤沢周平 202

編者解説
縄田一男 235

装画 村上 豊

装丁 熊谷博人

ご存じ不死身の男

〔ヒーロー小説集〕

大佛次郎

鞍馬天狗
〔風とともに〕

一

祇園ぎおんの茶屋では、外も座敷も正月の気分である。酌しやくに来る女たちの髪には、縁起えんぎものの稲の穂が挿さしてあつて、心地よい重味で垂れて揺れていた。

まだ、宵の口であつた。鞍馬天狗くらまてんぐは、昼間から連絡に来るのを待っていた男が来ないので、知らずに盃さかずきを重ねることになり、酔いが深くなつた。

「正月やもの」

と、顔を並べていた女たちは、競争のように酌

の手を差し伸べた。手水ちようずに立ったとき、足がよろけたのを、珍しいことだと言って悦よろこばれた。

それから小半刻こはんとき後に、鞍馬天狗は、狭い路地を小走りに歩いて、馴染なじみの芸子げいこの家の格子戸こうしどをあけてはいった。女あるじは外に出ていたが、使いを受けたので、すぐに戻つて来た。そのときは、鞍馬天狗は、留守番の老婆に手伝わせて、髪を剃そり落して、用意して来たよごれた法衣ころもに着換えて姿を一変していた。

「なにをなさるんです？ お正月もそうそうに」

と、女が呆あきれると、

「内証ないしよ、内証」

と、笑つて、

「お化けだよ」

お化けとは、節分の晩に廓くるわでは女たちも客も変装して陽気に騒ぐ習慣があるのを言うのである。

「いつか預けた杖を出してくれ」

これは、刀を仕込んだのを、見かけは、ただの竹杖に見せたものである。ただごとでないを知つて、女の顔には真剣な色が現れた。

「あしたになると、わかるだろう。たいしたことではない。どのみち、三日もしたら、戻つて来るだろう」

鞍馬天狗は、土間にかがんで、老婆に買いにやつた草鞋わらじをはいた。女あるじは、不安な様子でいたが、勝気な性質だし、この男のすることに慣れていたので、深いこともきかず、火灯石ひうちいしを切つて、無事を祈つた。

「天気はよし、またさすがに春だ。夜でも、しのぎよくなった」

外まで、ついて来た女に、こう言った。

「もう、このへんで帰れ。この姿で、あかりのあ

るところに艶めかしい女連れは墮落坊主だらくぼうしゅのようでおかしい」

「どっちへお行きやはりますか」

と、切ない心持で、それだけきくと、

「あ、こっち、こっち！」

と、笑っただけで、足速く、早春の闇の中へ姿を消した。

二

暮れの疲れもあるし、元日二日の廓の夜は早く静かになるものだ。町も同じことで、どこも寝静まっついていて暗い。これが、縄手なわての道を進むほど、闇の中のどこかになんとなく騒然とした物の気配が感じられた。

通行人があるわけでない。だが、近くの寺の境内けいや、空地に、黒い人影が充満していた。

時々、通りを横切つて、足音が走つて通つて行つた。

(来ているな)

と、鞍馬天狗は、笠を上げて見送りながら呟いた。

燈火は見えない。提灯も準備してあるが、嚴重に消燈命令が出ているのだ。だが、闇の中にも提灯の記章が丸に十の字で、薩州藩の軍隊だとわかる。鞍馬天狗は、先へ先へと歩いて行きながら、薩藩以外の提灯を持った者に会えないか、と注意を働かしていた。いったん京をひき払つて大坂へ退いた幕府の軍が続々と、京へ向つて上つて来る。これは、京に駐屯している薩長の軍を問責に、大部隊で進軍して来るのである。慶喜をはじめ、こんどは、実力を用いても薩長の勢力を都から掃蕩する決心で出て来たのだと伝えられた。

都にいる薩長の兵は、幕府の大軍とは比較にならずすくなかった。他藩の兵も集まっているが、これが徳川氏に同情的な立場でいるものが多い。いざ戦となったら、どちらに付くか予断できない。徳川方がこんどこそ退くまいと、強硬な覚悟で押し出して来たので、薩長との衝突は免れえぬとなると、これら中立的立場の列藩もやがて態度を明白にして、薩長と肩を並べて闘うかどうか、速急に決めなければならぬ。

「どうも、みな、逃げ腰だ」

この日の昼の間の情報はこう伝えられていた。これは、徳川方が朝廷に反抗しようとして出て来たのではなく、薩長の罪を問おうとしているだけだと名乗っている。それなら自分たちは関係のないことだから、中立でいたいという慎重な考え方があからである。いまとなつて日和見なので

ある。ことに、土佐のような強力な藩が、宮中の
ひようじよう
評定で徳川氏のために弁護するような態度に出
ているので、岩倉公以下の公卿たちも急に弱腰に
なり、場合によつては主上を擁して叡山に避難し
ようとして考え始めていたのである。重大な危機
であつた。

「とにかく、どこまでも闘う方針だ」

鞍馬天狗が祇園で待っていたのはこの知らせだ
つた。

「これが防ぎ止められなかったら、天下は、また
幕府のものだ」

「列藩の反対は、どうなる？　評定で押し切れる
か？」

「西郷さんは、容堂公と刺しちがえても廟議をま
とめると言っている。ここで、なまぬるく譲歩し
たら世の中は昔へ逆戻りだ」

それで、鞍馬天狗に、進んで来る敵の中にはい
つて、様子を見て来てくれ、という注文である。
「うん」

と、待っていた彼は快く微笑した。

「見たところで、なにも出来まい……いまのこ
ろ、どっちに分があるか、皆目、見分けがつか
ないというのが、正直なところだろう」

「まったくの天下分け目の勝負だ。苦しいところ
だ」

「見るだけ見て来よう。そのかわり、役に立つと
思ってくれるな。まったく、これは、どっちに運
がころぶかというところだ。だが、俺は苦しくて、
も、勝つと知っている。強引に引きずるだけだ、
日和見の奴らを。世の中が新しくなるか昔に戻る
か、まことに大切な分れ目だ。出かけるとしよ
う」

「用心して行きたまえよ。敵の中だ」

「危険は、どこにいても同じことだ。この一戦で、天下が、どちらに決まるかだけだ。少し、酒が過ぎた」

と笑ったが、その後の語気は、静かで真実なものとなった。

「大変な正月になったなあ。世間のために、ほんとうの新年になるかどうかだよ」

三

大坂から来る二つの街道の入口には、関門が出来ていて、味方が守っている。この深夜に、そこを通ろうとするのは、顔見知りの人間が詰めていない限り、めんどろなことなのである。

枝道や間道は、どこにもある。まだ、彼我の軍が接触し戦闘が始まっていないうちは、自由にそ

こを通り抜けられるはずであつた。郊外に出てから星空が大きく頭上にひろがった。さすがに早春のことで冷えて来ていたが、酒で軀を暖めて来たおかげで、苦になるほどでない。

伏見街道から、淀の方角に斜めに向う間道を歩み出した。平坦な野中で、竹藪があつたり、森があつたりして、時折人家を見るが、真暗で淋しい。この暗夜では、目じるしになる天王山、男山あたりの輪郭を捕えることも困難であつた。

徳川方の軍は、先鋒が淀まで来ていると聞いたが、現在は、一日の間にもっと進み出しているかも知れないのである。鞍馬天狗は、取敢ず、淀の城下へ出て見るつもりなので、出来れば見咎められる危険のない夜明け前に淀近くまで行きたかつた。

「坊主のなりをして来たことだ。まず、怪しまれ

ること、すくなからう」

それも戦争の始まる前に、敵の前線から深くは
いってしまふことと気がついた。距離から見て、
まだ暗いうちに近づくことが出来る。

絶えて人に出会わなかったのは、さすがに夜で
ある。だが、考えてみれば、開戦前とはいえ、敵
も味方も物見の者も出さず、前線を明け放しにし
てあることである。もし、これである程度の人数
の兵隊が、闇にまぎれて京の市中に潜入しようと
企てれば、^{くわだ}実に障害なく簡単に成功することのよ
うである。

徳川方に誰かその計略を考える者がなかったの
か？ 市中に戦火が起つたら、二つの関門を守っ
ている軍隊も動揺し、日和見の列藩の兵が寝返り
を打って徳川方に味方して出たかも知れないの
だ。

あたりの夜は、風の音がしているだけで寂莫^{せきばく}と
したもので、いったい、これで戦争が目の前に迫
っていようなどとは考えられないものだった。

（嵐の前だから、こんな静かなのか？）

こう呟^{つぶや}いたばかりに、鞍馬天狗は、立ちどまっ
て、聴^{ききみ}耳を立てた。

人の声がした。それも、女の悲鳴だったよう
である。

人家があるのも見えず、森と藪だけが、真黒で
ある。ところで、人が走って来る足音がした。

「助けて」

と、はつきりと女の声で呼ぶのを聞いて、鞍馬
天狗はその方角に急いで歩き出し、人の影が四、
五人で畑の中でもつれ合っているのを見て、

「おい」

と、大声で、となりつけた。

「どうしたのだ？　なにをしている？」

ばらばらと二、三人が逃げて、藪の中に隠れた。あとに残ったのが、女である。

「助けてくださいよ」

「どうしたのだ？」

「乞食なんです。女だと見て、わるさをしようと
して……」

鞍馬天狗は、歩み寄りながら落ちつきはらつて、笑い声を聞かせた。

「こんな時刻に、お前さん、ひとりで夜道をして
いたのか」

女は、地面から身を起しかけていたが、この声を聞くと、変に、ぎよつとしたように、鞍馬天狗を見まもった。

解けていたお高祖頭巾こそづきんをかぶりなおしたが、夜目にも顔色が白く、また姿もこのへんの女ではな

く、町の者である。

「はてな？」

と、鞍馬天狗は、その顔を覗き込んだ。

「なんだ。古門前ふるもんまえのおえんじやないか？」

「まあ……」

と、相手は驚きを隠して作り笑いした。目明めあかしの古門前の長次ちやうじというものの妾めかけなのである。

「お声が似ていると思いました。が、旦那だんなさんは、いつ、御出家になりました？」

四

おえんは、亭主の長次の仕事で片腕になつていくくらいに、油断のならない女である。それも壬生みの新選組や見廻組みまわりぐみなどの、幕府側から長年の間重宝ちやうほうにされていたのだから、真夜半まよなかにこんな場所に来ているとは、なにか、理由のあることにちが